

フランス第三共和政初期における林間学校

——衛生と健康の教育をめぐる——

犬飼 崇人

はじめに

フランスにおいて、教育行政が林間学校活動に積極的に乗りだしたのは一八八〇年代後半である。ここで「林間学校」というのは、フランス語の「colonies de vacances」のことをさす⁽¹⁾。この語の定義としては、林間学校活動を公教育に持ちこんだエドモン・コティネ(Edmond Cottinet)の言葉によると、「林間学校は予防衛生の制度である。それは初等学校の虚弱な子どもたちのためであり、もっとも虚弱である中でももっとも貧しい者、もっとも貧しい中でももっとも賞賛に値する者のためである」という。その目的は「田舎のただ中での自然な運動により、または清潔さ、よい食事、陽気さにより、大気療法を助ける」ことである。また、その定義には示されていないが、活動は夏期休暇中に行われた。要するに林間学校とは、休暇のあいだ、都会からはなれた自然環境、あるいは衛生的な環境のもとで健康を増進する制度として行われた活動である。そのような定

義からも、これを、学校環境の整備や衛生の徹底といった試みと発想を同じくし、それをさらに徹底したものととして位置づけられるだろう。

本稿では、一八八七年に公教育省が後援することになった林間学校の活動に焦点をあわせることで、その背後にある政府や社会および家庭のニーズについて考察する。そこでは衛生や健康、自然や楽しみといったコードに基づいて活動が行われており、当時であって、そういった価値が奨励されていたと考えられるのである。時期としては、一八八〇年代から九〇年代を対象とする。この時期は、コティネによる私的な林間学校活動が公教育省の援助を獲得し、そのための各種の制度が整えられていく時期であり、教育行政が林間学校活動を推進しはじめる時期としてみなすことができる。

この時期の林間学校に関する研究は、公教育からは周知的な位置にあると考えられたためか、大戦間期などと比べると少ない。基礎的な研究としては、レイ・ヘルムによる一九五〇年代の研究がある⁽⁴⁾。

林間学校は、もともとカトリックやプロテスタントによって慈善活動として行われたのであり、この研究は、その発祥から二〇世紀初頭までの各種の林間学校活動を取りあげ、その発展や主催者の発想などといった分析を行っており、広範な研究である。ただ、そこでは教育行政や参加者との関連は薄く、活動自体がどのような社会的背景のもとに行われたのかについては考察がなされていない。その後、ほとんど研究が行われないままであったが、近年、ダウンスによる研究が進展をもたらした。⁽⁵⁾ 彼女は、林間学校自体だけでなく、特に労働者階級にとってそれが果たした役割を明らかにした。だが、学校教育および教育行政と林間学校との関係についての考察はあまり行われていない。そこで本稿では、林間学校と教育行政との関連を問い、さらに人々の積極的な参加を促した理由について考えていきたい。こうした考察によって、当時の行政や社会における身体への関心の一端を、明らかにできると思われる。

史料としては、『教育雑誌』(Revue Pédagogique) 中の林間学校に関する記事を中心に用いる。この雑誌は、元大学視学官のシャルル・アンリオによって一八七八年に創刊された月刊誌で、一八八二年には教育博物館 (Musée Pédagogique) の公式機関誌とな⁽⁶⁾る。このときに新シリーズとなり、雑誌の形式や記事の構成も定ま⁽⁷⁾っていく。最終的には一九二六年の第八六巻まで続くことになる。編集部については、編集委員会の代表がオクタヴ・グレアル、副代表がフェルディナン・ビュイッソンであり、他にも教育行政の中心的な位置にいた人物や時々の公教育大臣も含まれている。寄稿者の幅も広く、トップ・クラスの行政官だけでなく、初等教育機関

の教員や教育学者、リセの校長なども含まれる。さらに、医師、建築家、衛生学者、軍人、政治家、場合によっては登山クラブの副代表までが、記事を寄稿したり、あるいは彼らの講演した記録が載せられたりする。読者については詳しくはわからないものの、雑誌の専門性を考えると、少なくとも何らかの形で教育にかかわる人々だろうと思われる。

編集部や寄稿者が教育行政や教育学の最先端とほぼ重なっているということから、『教育雑誌』は当時の議論を広く代表していたのではないかと考えられる。当時このほかにも教育の専門誌はあったが、この雑誌はど教育行政の中心的役割をはたした人物が関わっていた雑誌はないだろう。しかも、現場の教員たちも手にしていたはずであるから、はっきりと知ることとはできないものの、彼らへの影響もあったと思われる。また、月刊誌というメディアであることから、当時議論されていた話題がほとんど時間差なく誌上に掲載されていた。⁽⁸⁾ 『教育雑誌』は教育に関する総合的な雑誌であって記事のテーマは多岐にわたるが、林間学校については一八八七ごろに議論がまとまって掲載されるため、これを参考にする。

一 身体教育と衛生と身体文化

(一) 身体教育の変化

林間学校活動がコティネによって行われ、公教育省がその援助に積極的な姿勢を示すには、どのような背景があったのだろうか。それを考えるためには、一八八〇年代のフランスの状況を押さえておく必要がある。

フランスにおける一八八〇年代前半は、「フェリー時代」と呼ばれ、第三共和政の基礎固めの時期として位置づけられる。その名は、この頃、公教育大臣や首相を歴任するなどの中心的役割をはたしたジュール・フェリーに由来する。この時期を、マイユールは「共和国の『創立者』の時代」⁽⁹⁾とも名づけている。実際、「共和主義的自由、反教権主義、植民地拡張を三つの柱とする諸政策」⁽¹⁰⁾が次々と導入され、実施されることで共和政の基盤が整備されていった時代であった。

とりわけ反教権主義政策は教育の分野と関係が深い。なぜなら初等教育は、教会と国家とが自らの覇権を獲得しようとして、一九世紀を通じて闘争の焦点となってきた分野であったからだ。これがまさに「十字架と三色旗」の問題である。⁽¹¹⁾そしてついに政府は、一八八一年から翌年にかけて次々と立法化されたフェリー法といわれる一連の法律の制定によって、公立の学校における無償、義務、世俗性を実現する。これらは「公教育の三原則」といわれるものであり、この改革によって再キリスト教化をもくろむ教会勢力を抑えようとした。このようにして実現したフェリー法を、反教権闘争の文脈だけでなく広く教育史上における画期とみなすのが通説のようである。

その中でも、第三共和政における初等教育の内容にとって決定的な公文書となったのが一八八二年のカリキュラムである。⁽¹²⁾これ以後、この政体を通じて教育内容に関する抜的な変更は行われず、したがって初等教育に関してはこの時点でその内容がほぼ確定したと評価される。⁽¹³⁾このカリキュラムに特徴的なことは、知育や道德教育とならんで身体教育が明記されたことである。しかも、道德教育では

衛生が徳目の一つとして掲げられたり、身体教育に衛生指導が導入されたりと、それ以前の内容に比べて身体および衛生が無視できない教育内容となっている。したがって、学校教育自体が重視され、知育や道德教育はもちろん、それに加えて身体教育の要求が高まったということが第三共和政期における初等教育の大きな特徴といえる。

また、愛国心の高揚を反映した軍事教育が、身体教育の一つとして導入された。その例としてあげられるのが、「学童の大隊」などと訳される、バタイヨン・スコレル (Bataillon Scolaire) である。⁽¹⁴⁾ちょうど一八八〇年代は、人口の伸びなやみなど、人々のあいだに危機感が広まっていた時期であった。そこで政府は、衛生改善による健康増進と初等教育段階からの身体訓練とをペアで推進することを意図した。こうすることで、健康でたくましい人間を育て、フランスの国力を確保し、愛国心を養うと同時にそれに応えようとした。身体教育の問題は、個人の身体だけではなく、国力の問題でもあった。

ところが、一八八〇年代後半になってくると他の論調が加わってくる。その代表例はパリ医学会の警告である。一八八七年に同会は「学業過労」(surmenage) の問題を提起した。学業過労とは、学校における詰めこみ教育と、それによる児童・生徒の体力の低下のことである。医学会はこうした現状を批判し、その対策の一環として、休憩と運動の時間を増やすことと身体訓練を毎日課することを主張した。⁽¹⁵⁾あるいは、それと別の立場からクーベルタンが主張したのは、若者が「遊び」を知らないことが問題であるということだった。⁽¹⁶⁾

政治的にも、おりしもブーランジェ事件が起こり、これを経て軍事教育への批判が強まっていた。そして、一八九〇年には、一八八〇年に作成された教員向けの指導書である『体操と軍事教練』に代わって、『体操と学校遊戯』が使われはじめた。⁽¹⁷⁾このような指導書の更新からも、教育行政における身体教育に対する意識が変化したと考えられるだろう。こうして、一八九〇年代からは、身体教育は軍事教練から切りはなされ、むしろ遊戯やレクリエーションがその一環として取り入れられていく。林間学校の導入の背景には、このような身体教育の方向性の変化が存在していた。

(二) 学校と衛生

また、学校における衛生が課題として浮上していた。フランス第三共和政は、研究者が「衛生共和国」や「自由・平等・清潔」と呼ぶほど、とりわけ衛生に関心の高かった時期でもある。⁽¹⁸⁾それより少し前にはバストゥールによる細菌の発見があり、このときが衛生をめぐる認識の転換点とみなされる。⁽¹⁹⁾だが、病氣の原因を調べる技術は進展するものの、まだ治療法が確立されなかったため、一八七〇年ごろからは予防に努めるようになった。このため、公衆衛生はこの時期に組織化され合理化される。⁽²⁰⁾もちろん、その理論と人々の実践や習慣とのあいだにはまだ大きな隔たりがあったが、衛生への関心が高まっていたことは否定できない。たとえば、一八〇二年に設置された衛生委員会は長いあいだ実効性を持たなかったが、第二帝政期になると、むしろ地域住民や農民の側が公権力を利用してみずからの目的を達成しようとしたことが近年の研究では指摘されている。⁽²¹⁾

そして、学校教育を通じて、共和国が個人の身体へ衛生を内面化させるという意図がこの時期に顕著になった。就学年齢にある子どもまでもが医学的な監視の対象となり、市や県が学校への衛生監督を組織することになる。学校は、多くの子どもが集まる場であるため、病氣が伝染しやすい場所でもあった。逆にいえば、衛生の習慣を多くの子どもに伝達し実践させることが可能な場にもなりうる。実際、第三共和政期にいたって衛生の理念と実践が初等学校にも導入されることになる。中等教育機関においては、すでに一九世紀前半から洗面所や入浴のための諸設備などといった衛生設備が整えられ、世紀半ばには施設の衛生基準が規定されていた。⁽²²⁾しかし、初等教育においては手つかずのままであった。そこで、前述のカリキュラムに衛生指導が盛り込まれ、以下に述べる各種の制度が導入されることになる。

初等学校の衛生に関する法律は一八七九年の医学視察官制度の制定からはじまる。その目的は、初等学校に通う子どもたちを医学的に監視する原則を確立し、組織化することだった。⁽²³⁾医学視察官が行ったのは、校舎が衛生的基準を満たしているかどうかの検査、一年に二回の健康診断、一週間に一回の定期検査、児童や教師への衛生教育だった。⁽²⁴⁾そこでは、病氣の早期発見や予防などが意図されていた。この制度に関して、『教育雑誌』⁽²⁵⁾には「学校における医学視察制度」というタイトルの記事がある。これは、一八八六年にパリで行われた衛生会議の内容を解説し、著者の意見を加えた記事である。会議においてベイリーという医師が「この医学視察は通学義務の論理的な結果であり、不可欠なものである」との意見を述べたように、

医学視察の必要性は通学義務と密接に関わっていた。だが現状としては大都市や財政的に恵まれた県のみでしか行われず、全国レベルではまだ定着していなかった。この著者は、「行政がこの制度を統轄する、またあらゆるところで機能させる、そうした実践的な方法を探し、見出すこと」を望んでいる。ここからは、医学視察が散発的に行われてはいたものの、その全般的なネットワークが欠如していた現状がうかがえる。

また、学校の衛生を管理する同様の制度として、一八八二年には学校衛生委員会が設置された。一八八二年といえ、同年に出されたカリキュラムにおいて、身体教育の一項目として「衛生や清潔さの管理」が置かれたことが想起される。委員会の目的は、児童・生徒の健康を管理すること、一八八〇年に制定された学校建築基準が遵守されているかを監視することだった。学校建築基準は『教育雑誌』に全文が図版つきで掲載されている。校舎、設備、備品などについて学校が満たすべき目安が全一〇七項目にわたってあげられ、学校建設の際に参照されるべきモデルが示された。これが掲載された際に、序文として付された編集部の言葉によれば、「教育学は、子どもたちに与えるさまざまな規則だけではなく、学校を清潔で過ごしやすくするのにふさわしい、衛生と快適さの諸規則も含む」という。このように、衛生と快適さということが学校のために不可欠な要素として考えられ、各種の制度が設けられたのである。

では、それらの制度の対象となる初等学校は、いかなる状態だったのだろうか。一言でいえば学校は、現在イメージするようなものではなく、環境も今日からすれば整っていなかった。街の中心部か

らは外れていて、逆に居酒屋や公衆便所に近接しているなどというように、立地条件は子どもが通うのに好ましい状態ではなかった。

また、設備に関しては、廊下がない、中庭もない、トイレもないといった状態だった。そもそも学校は、教員が賃借している部屋であり、しばしば住居と教室の区別がなされておらず、「学校」という一つの独立した施設ではなかった。また、教室は学校としての用途に適していない、すなわち、暗く、湿っていて、換気が悪く、暖を取りづらいという状態だった。さらに、面積は非常に狭く、都市では一クラスに一〇〇人以上いる場合もあった。こうした学校の状態の悪さを嘆く教員が存在していたことは、一八六一年のコンクールに出された意見からもうかがえる。

結局、教室が四、五〇人のサイズに分割され、中庭が配置され、トイレがつくられ、学校という施設として独立するようになるのは、第三共和政期以降になる。パリのいくつかの学校を例外として、フランス全体ではおおむねそのような状態にあった。こうした状況を改善するためにこそ、政府は一八七〇年代後半から一八〇年にかけて学校の建設にかかわる法案を整備した。学校建築基準はこうした延長線上に定められたのである。

(三) 散歩・療養・運動

この時期、行政だけでなく人々のあいだでも、散歩、療養、運動といった身体への関心の高まりが見られた。これらは、いずれも林間学校の活動に関係の深い要素である。散歩は、行楽として人々に好まれるようになり、週末には都市の外へ出ていくことが気晴らし

となった。印象派の画家たちや文学者たちもこのような情景を作品のモチーフとした。また、一九世紀末は、鉄道の発達もあいまって温泉地や海浜リゾートへ広い階層の人々が足を運んだ時代だった。その目的は、レジャーとしての旅行の場合もあれば、結核の治療や健康の維持・増進のためであったりもした。温泉地は、湯に浸かって快楽を得るというよりも、鉱水を飲むことによる健康増進のための場所であった。そして観光業の発達と同時に、散歩をしながらその土地の風景や気候を味わうという目的もあった。海浜リゾートについていえば、二〇世紀初頭には余暇として水泳を楽しむ場所となっていくが、まだこの時点では治療のための海水浴が主だった。⁽³⁷⁾

また、体操、射撃、スポーツといった運動も一九世紀末の身体文化にとって重要な位置を占めた。体操団体、あるいは射撃団体が普仏戦争後から急速に増加した。その原因としては、しばしば普仏戦争（独仏戦争）の敗戦による愛国心の興隆が指摘される。しかし、ルコックは、その可能性を認めつつも、同時に活動自体が人々の気晴らしになっていたことを指摘する。体操や射撃の団体は、愛国心や軍事的な目的に基づいていたのはたしかであり、従来の研究ではそう指摘されてきた。だが、それだけにとどまらず、諸団体は余暇のための組織としても機能したのである。他方で、一八八〇年代はフランスにおけるスポーツの発展と組織化にとっても画期的な時代であった。たとえば乗馬や徒競走、自転車など、各種団体の創設およびその活動がさかんになったのもこの時期である。そうした時代の世相を反映して、一九世紀末から二〇世紀初頭には「スポーツおよびスポーツをする身体を主題にした文学作品の創作ブーム」⁽⁴⁰⁾が起

こった。

このように、世紀末へ向かうにつれて、身体活動が人々のあいだでさかんに楽しめるようになった。人々の身体への関心は余暇とそして余暇はさらに「自然」と結びついていった。散歩や療養などのように、都市から郊外、さらには遠く海辺の土地や山間の温泉地に移動することが余暇となった。そのような「場所」、さらにいえば、そうした場所の「空気」や「水」が余暇あるいは療養の重要な要素となっていた。一八八四年に最初の観光協会がつくられたことも、そうした機運の盛り上がりや無関係ではないだろう。⁽⁴¹⁾ また、愛国心が体操や射撃といった形で表現されると同時に、それらの活動自体が余暇としても楽しまれた。このような身体への関心のあり方は学校においてもさまざまな形で現れてくるのではないか。かならずしも軍事教育的な側面ばかりではなく、「自然」や気晴らしといった要素も、子どもの身体への教育として存在したのではないだろうか。そして本稿の関心にとって重要なことは、林間学校という制度もまた、こうした動きと深い関係にあるのではないかということだ。

その同時期の教育行政は、先に述べたとおり、学校の衛生化のための制度を整え、さらに教育内容として身体教育を正式に導入していた。児童の衛生的な習慣の形成、そして運動により身体的な成長を促すことが試みられたわけである。学校は、衛生的な習慣を身につける場所として位置づけられたため、当然、清潔の保たれた場所でなければならなかった。林間学校は、このような生活環境への衛生的配慮をさわめて意図的に行い、なおかつそこに緑や自然といった要素を持ちこむことで、健康の増進をはかる活動として行われた。

したがって、学校環境や健康をめぐる一連の発想がもつとも先鋭にあらわれたのが、林間学校ではないかと考えられる。

二. 林間学校の始まり

林間学校活動が求められた社会的背景には何があったのだろうか。まず、活動の対象となるのは、重い病気でなくとも健康状態の良い子どもたちであった。しかも、学校が夏期休暇に入ると、状態はさらに悪化しやすい。なぜなら、子どもたちは、両親が働きに出てから帰るまでのあいだ、狭く暗いアパートで過ごす時間が多くなるからだ。学校にいるときより運動量も減る。このように、長期休暇中、子どもたちが衛生的でない状態に置かれたからこそ、林間学校やそれに類する活動が行われたのであると、ダウンスはいう。たしかに、かつて都市の子どもは工場などへ労働に出ていたが、すでに一八七四年には一二歳以下の児童の労働が禁止されていた。⁽⁴³⁾つまり、夏の休暇中というのは学校もなければ働くこともできない期間なのである。農村であれば家業を手伝うなどして過ごすこともあっただろうが、都市の労働者の子どもたちにとってはそれもできない。だからこそ、児童たちにとってむしろ有害にさえなりかねない夏の休暇が問題となったのである。

さて、コティネによる林間学校以前から似たような試みは行われていた。たとえば、プロテスタントの団体による慈善活動がそれであり、ロリオ牧師夫妻やプレサンセ夫人の活動は、それぞれ一八八〇年、八二年に開始されている。⁽⁴⁴⁾公教育においても林間学校の以前にいくつかの活動があった。発想としては、すでに一七九四年に

「自然における教育を」という主張がポルティエという人物によって出され、身体、精神の両面への教育的効果が主張されていた。だが、この案は他の多くの教育案と同じく実現にはいたらなかった。⁽⁴⁵⁾

一八七〇年代になるとようやく先駆的な試みが行われる。フェリー改革に先立つこと一〇年あまり、パリのリセであるテュルゴー校は早くから学校教育改革を行い、それまでの古典語重視の姿勢をあらため、近代語や実用科学を重視したカリキュラムを組むとともに、その改革の過程で学校旅行(voyage scolaire)を実施した。この活動は、優秀かつ勤勉な子どもを対象とし、一日から一〇日間におよぶ遠足を学年末である夏の休暇中に行った。場所は、ヴェルサイユやフォンテーヌブローなどの近郊の場合もあれば、ル・アーヴルやオンフルールといった、パリから二〇〇キロ以上離れた海辺の都市まで足を伸ばしていたこともあったようである。田舎の新鮮な空気が見えない風景のおかげで、一年間の勉強に疲れた子どもたちの顔がいかに健康的に輝きだすかを、校長のボルシェは満足気に語る。この活動が後に他のリセで行われ、そして初等学校でも実施されるようになる。一八八二年には、必要に応じて各学校に財政的支援を行う機関として学校金庫(caisses des écoles)が設置され、ここからの資金が活用されるようになった。⁽⁴⁶⁾

修学旅行団(caravane scolaire)についても『教育雑誌』に記事がある。⁽⁴⁷⁾記事は、一八八三年三月三〇日の講演の記録であり、フランス登山クラブの副代表であるデュリエールがソルボンヌでの教育会議(Congrès pédagogique)で行ったものである。それによると、修学旅行団とは、二週間ほどの期間、ある地域中を徒歩で探

索し、あるいは山に登るなどといった活動である。この講演に先だって、師範学校の生徒たちとクラブの登山家たちとで登山が行われていた。また、彼を講演者として招いたのが公教育大臣であることも記事の中でふれられている。どうやら、講演者の立場からも推測できるように、フランス登山クラブの経験を師範学校や公立学校へ導入しようという意図があったようである。デュリエール自身も、活動を広めるのに積極的であることが記事からうかがえる。

この修学旅行団においては、林間学校へとつながる要素が多く見られる。デュリエールは「衛生的な運動、精神のレクリエーション、自然の美しさへの観想、これらが修学旅行団の一番の利点である」という。ここで述べられている、①運動、②レクリエーション、③自然という三点は、まさに林間学校においても重視される点である。その他に制度の面でも、学校施設に宿泊することや鉄道の団体割引を適用するなどという点が共通している。これらの点は、児童・生徒の団体を引率していくために考慮せざるをえない実面的な側面だったのだろう。学校旅行においても、やはり自然による効果が指摘されていたが、運動やレクリエーションといった点までが明確な目標として想定されていたかは不明である。このような先行する諸活動の成果がすでにあり、林間学校は、それらの活動からいくらかを吸収したうえで登場したのではないだろうか。

フランスにおいて、行政が積極的に林間学校を推進するようになるきっかけは、一八八三年、このときパリ九区の学校金庫に勤務していたエドモン・コティネの試みにある。もともとチューリヒの牧師であったピオンという人物によって始められた活動を、コティ

ネは受けつ⁽⁴⁹⁾いだ。一八八七年には、その活動を報告した記事が『教育雑誌』に掲載され、これが大きな反響をよんだ。というのも、その記事が出たあと、同年内に三本の別々の記事が一举に掲載されているのである。その二本目の記事への編集部のコメントによると、コティネの活動を拡大したいと考える人物がかなり集まったという。その最初の会合において彼が講演した内容が、記事の主たる内容である。⁽⁵⁰⁾ 会合は五月二六日に教育博物館において行われ、その結果、林間学校を宣伝し奨励する委員会として林間学校パリ委員会(Comité Parisien des Colonies de Vacances)が、ビュイッソンの主導によってつくられた。

記事には、活動の推進に署名した人物のリストがあり、幅広く、しかも教育行政や政治の中枢にいる人物の名前がある。先述のビュイッソン、第二帝政期に公教育大臣を務めたデュリュイ、アレクサンドル・デュマの息子の方、パリ市議会議長オヴラック、グレアル、上院議長、下院議長、初等・中等学校の校長などや、パリ商工会議所の会員などである。⁽⁵¹⁾ それらの名前だけでも、林間学校の活動推進に行政も積極的で、コティネは幅広い支持を集めているようにみえる。

実際、財政援助という点でも彼は支援を獲得することができた。最初の頃は、雑誌や新聞などのメディアを通じて、あるいはリセでの募金活動などによって寄付を募ってやりくりをした。たとえば一八八三年には、一人当たり女子は約一〇四フラン、男子は約八六フランの経費を必要としていたのである。⁽⁵²⁾ しかし、委員会が発足すると、よりコストのかかる学校旅行への資金は減らされ、より多くが

コティネの林間学校へと流れこんだのである。⁽⁵³⁾

林間学校の発展の規模についても確認しておきたい。コティネが活動を始めた一八八三年の時点の参加児童は男女それぞれ一グループずつで、一八人だった。⁽⁵⁴⁾これが、八四年には一〇〇人、八六年には一二〇人となる。⁽⁵⁵⁾これらの数字は、委員会がつくられる以前であるからパリ九区だけの人数である。コティネはこの成果を携えて講演を行った。また、委員会がつくられてから、一八八八年には全二〇区のうち一三区で、九〇年には一九区で林間学校が実施されるようになった。⁽⁵⁶⁾児童数としては一八九五年にパリ全体で三二八七人の公立初等学校の男女児童が参加し、一九〇二年には五三二九人へと増加した。⁽⁵⁷⁾この他に、公立学校以外の活動を含めれば、広い意味での林間学校活動への参加者はより多かったはずである。このように、林間学校は年をおうごとに参加者も増えて、規模を大きくしていった。そこには推進する側の供給だけではなく、需要が広く存在したこともあっただろう。

林間学校の活動を広めようという動きが起り、それが『教育雑誌』に掲載されたのが一八八七年だったことは、あながち偶然ともいえない。この年、まず林間学校に関して四つの大きな動きがあった。順に、①教育博物館のシリーズの一冊としてピオンの回想録が発行されたこと、②先ほどの林間学校パリ委員会の結成、③コティネによる小冊子『林間学校の形成と機能についての基礎知識』の発行、④コティネを交えてのパリ市校長会議である。ちなみに、この④の会議においては、林間学校に関する最初の公的文書が通達として出されている。さらに、この一八八七年は、ちょうど学業過労や

軍事教練の見直しを主張する意見が医学会から出された年でもあり、身体教育全体の見直しがされはじめた時期だといえる。このことから、新しい身体教育が模索されていた時期にあって、林間学校への支持はそのような動きと連動していたと考えられる。ヴァカンス期に子どもたちを自然に連れていくという発想は必ずしもこの時にはじまったことではないが、この頃から共和派の行政が積極的に林間学校を推進する体制が出来あがってくるのである。

さらに、林間学校の活動、あるいはもっと広く身体教育といってもいいが、その分野もまた反教権闘争の流れの中にあつたのではないかと考えられる。カトリックの林間学校活動は、プロテスタントや共和派には遅れを取るものの、一八九〇年代後半には組織される。夏期休暇をいかに組織するか、共和派の政府としても自らが活動を牽引しなければならなかったのではないか。そのとき、共和派の場合には他の活動のように個別的な慈善活動とは異なり、活動を行う都市とそれを受け入れる地方というように、全国に張りめぐらされた学校のネットワークを持つ公教育省が統轄していくのである。⁽⁵⁸⁾

だが、林間学校活動の最終的な目標はそれぞれ異なっていた。宗教団体の活動が保健衛生を通じて宗教心育成や慈善活動の拡大を目指すのに対して、以下で検討するように、共和派の活動はあくまで療養に徹していた。というより、衛生や体力の増強といった身体への教育こそが共和派にとっての最大の目的だったと考えられる。では、この活動にはどのような教育的発想や意図が込められていたのだろうか。

三. 林間学校の活動

林間学校での試みや、そこにあった発想を探るため、すでに何度かふれた「林間学校の形成と機能についての基礎知識」という『教育雑誌』の記事を中心の史料として考察していきたい。⁽⁶⁴⁾この記事に編集部が付けた説明をみると、林間学校にかかわる行政官たちの基礎知識はいまだ十分でなく、早急にそれを広めることが必要とされた。そこで、その基本情報の提供を経験の豊富なコティネに頼んだ、という経緯のようである。⁽⁶⁵⁾内容としては、林間学校の定義からはじまり、財源、支出といった面、あるいは場所や必要な設備、持ち物、注意点、活動内容や時間割などにわたり、幅広く必要な情報が提示されている。それらの知識はコティネ自身の経験をふまえたものであり、ここで語られたようなことがらは、林間学校を実践する者たちによってその後も参照されたはずである。こうした点からも、この記事に着目するのは有効だろう。

林間学校では、まず活動を行う環境が重視された。林間学校の「目的は、田舎のただ中での自然な運動により、または清潔さ、よい食事、陽気さにより、大気療法を助ける」ことだった。したがって、ふさわしい環境とは、田舎であり、清潔さが保たれ、よい食事が提供できる場所になる。また、大気療法のためであるから、空気がきれいなところでなければならぬ。コティネの友人でありジャーナリストであるサルセイの記事では、林間学校は「良い空気、歩きまわること、遊戯、健康的でしっかりした食事の一ヶ月、⁽⁶³⁾街路の排水溝の悪臭からは遠く、たくさん山や森に囲まれた一ヶ月」と

表現される。この一文からも、ほぼ前述のような発想を読みとることができる。

⁽⁶⁴⁾望ましい環境として、高度とパリからの距離についても述べられる。高度については、それが高いところのほうが貧血や肺結核などへの大気療法のためには効果があると主張されており、この考えには衛生学者たちも一致しているという。パリからの距離は、六〇キロ以上離れた場所であれば問題ないという。そうすると鉄道を利用することになり費用もかかるので、団体割引などを利用する。また、海辺については、「これ以上に魅力的な場所はないが、これ以上に危険な場所もない」⁽⁶⁵⁾。というのもコティネは、虚弱な子どもにとって海はふさわしくないと考えるためである。このようにして、理想とされる土地の高度、パリからの距離が示され、なおかつ海は危険であるから避けるべきだとされた。

さて、活動を行うためにはそのような条件を満たす場所を実際に選定しなければならない。⁽⁶⁶⁾そこで、知事、アカデミー管区長、その管轄にある視学官の協力が求められた。宿泊場所としては、師範学校、リセ、コレージュをコティネは勧める。これらは無料で使用できるうえ、私立学校の寄宿舎よりも広く、しばしば清潔であるという。なかでも、当時建てられたばかりの師範学校の校舎は、衛生的に申し分なく、天井が高く、清潔で、入浴などの水治療法のための設備が充実しているとして、これを勧めている。⁽⁶⁷⁾林間学校は、地区ごと、たとえばパリであれば区の単位で、パリ市外であればカントンごとに組織されたようである。その代表者は細心の注意を払って宿泊場所の衛生状態を調べなければならない。その際、市長や初等

教育視学官が持つ情報だけでなく、アカデミー視学官や衛生委員会の情報も参考にするべきであるという。その他、一週間の食事のメニューなど、食事についても正確に調べることが求められる。このように、林間学校においては、場所の選定についても生活環境や生活習慣などに最大限留意することが不可欠とされた。

では、宿泊地においてはどのような生活をして、どのような活動を行ったのだろうか。実はこの問いは正確ではなく、活動は出発前からはじまっていたといってもよい。着替え、洗面具、ブラシ類などの、要するに身のまわりの道具を携行するべき物品としてそろえなければならなかったからである。そこから、すでに学習がはじまっていた。宿泊地に到着してからは、入浴のための道具などをすぐに調達して体を洗うようにコティネは⁽⁸⁹⁾いう。師範学校以外だと、これらの施設が欠如しているとして、ここでもやはり師範学校を勤めている。林間学校は児童が生活の全体を過ごす活動であるから、普段学校にいる以上に設備や持ち物にまで気が配られた。

より具体的な活動を把握するために、一日のだいたいタイム・スケジュールを見てみたい。⁽⁹⁰⁾まず、子どもたちはパリにいるよりも早く目覚める。活動は、ベッドを片付けるところからはじまる。靴を掃除し、服にブラシをかけ、寝室の掃除をする。こうした一連の作業を子どもたち自らが行う。コティネは、子どもたちがこうした習慣を身につけるので、両親たちから何度も感謝された。なぜなら自分の周りを整えるこのような習慣を貧しい子どもたちはほとんど身につけていないからであるという。それがすむと今度は身支度にかかり、石鹸と水で体を洗う。そのあと散歩を行う。散歩は林間学

校においてもっとも中心となる活動である。ただ、虚弱な子どもたちであるから、ゆっくり、段階をふんで行われる。散歩時の注意としては、打撲傷や刺し傷のための薬を携行すること、日射病に気を付け、果物や水の取りすぎには注意することなどがあげられる。雨が降れば別の活動を行う。男女で共通しているのは、遊戯、歌、ダンスなどである。⁽⁹¹⁾女子に限ったものでは裁縫があげられ、男子では田舎の仕事、体操があげられている。夜は、劇の上演を試みたり、即興のダンスを行ったりした。このような林間学校における生活は、学校がない普段の子どもたちの生活と比べると、清潔さや健康に配慮し、身体を動かす機会が多かったことは想像に難くない。学校のように特定の身体活動の時間が設けられるというより、林間学校においては、子どもたちが生活の中で清潔さの習慣を身につけ、散歩や運動を行うのである。⁽⁹²⁾

生活ということでは、林間学校は共同生活の場であり、その集団性についても指摘しておく必要があるだろう。子どもたちは同じ部屋で眠り、同じテーブルで食事をとった。子どもたちだけではなく、教員もかならず同じ部屋で寝起きすることをコティネは主張した。「林間学校は一つの家族である」というのが彼の考えである。⁽⁹³⁾しかし、プロテスタントの活動ほどは「家族」ということをうたっていないかった。プロテスタントは『アンチ制度』の制度である。とダウンスが表現するように、活動の基盤を家族性におき、農家へ都会の子どもたちを数人ずつあずけるやり方をとっていた。それに対してカトリックや共和派の活動は集団性を重視しており、そこではむしろ「家族」的な要素は制限されていた。⁽⁹⁴⁾教員が子どもたち全

体を率いるという形態は、学校や教室でのあり方と共通するところがある。

活動の効果については、サルセイが述べている。⁽⁷⁵⁾ 彼によると、身体と知性との二つの側面で好ましい効果もたらされるという。身体面では、胸がふくらむ、頬が張る、筋肉が増強される、歩くことで余分な脂肪が落ちるにもかかわらず体重が増えるという点である。また、知性への効果としては、見知らぬ土地を訪ねることで思考(Douces)の境界が広がることとがあげられている。というのも、パリの子どもたちは田舎のことを何も知らない。コティネもまた、彼らが田舎の生活に直接ふれることの重要性を強調している。⁽⁷⁶⁾ こうして、子どもたちは身体的にも知性的にも自然の中で陶酔を味わう。「彼らは(文字通り) 広大な空気とそれまで知りえなかった感覚に酔いしれる⁽⁷⁷⁾」というのである。しかし、これらの言説は、あくまで主催者側であり林間学校を行う大人側からの評価である。しかも、自分たちの活動を宣伝する役割も果たすため、いくらかの誇張があるかもしれない。ただ、ここで指摘しておきたいことは次の点である。すなわち、前述のように林間学校の活動がこの後も続けられ、しかも参加者や規模において拡大していくことは、この活動内容が子どもたちやその両親によって支持されたからではないかという点だ。そう考えると、サルセイがあげたような効果や子どもたちが感じた解放感というののもあながち偽りともいえないのではないか。

先にあげられた中には含まれなかったが、もう一つ重要な点がある。それは、林間学校の生活を通して身につけられる諸価値であり、

そのことはコティネの次の言葉にあらわされている。「清潔、規律の正しさ、礼儀正しさといった子どもたちが持ちかえる習慣のうちに、労働者階級の家庭が何も得ないわけがない⁽⁷⁸⁾」という言葉である。規律とは、集団生活の中で築かれる社会性や、朝の支度などに見られる身のまわりへの配慮があげられるだろう。その配慮は清潔さにもおよぶだろうし、なにより毎日体を洗うことなど、衛生への配慮はこの活動のもっとも中心的な課題だった。そして、それらの価値が子どもを通して労働者階級全体へ広められていくことの期待が、コティネにはあった。いや、コティネだけではなく教育行政側にもあったと考えられる。このような価値は、身体の増強という点と併せて、まさに共和政府が民衆に獲得させようとした価値であり、そうしたことから政府がこの活動を支援したことは納得できる。

また、その後の展開についてふれておきたいのは、林間学校の活動が衛生よりもむしろ教育を重視するようになったということである。衛生と教育という二つの目的は共存していたものの、コティネは衛生を特に重視しており、教育はいわば二の次だった。ところが、世紀転換期になると、教員たちは衛生よりもむしろ教育に重点を置くようになる。当初の林間学校は虚弱な子どもたちの療養という目的が強かったが、その後、散歩などにしてもより教育を重視したものに切りかわっていくのである。⁽⁷⁹⁾ このように考えると、林間学校の初期である一八八〇年代のほうが後の時期よりも身体教育として健康増進を目的とした色彩が濃かったといえる。

林間学校の需要は三つの側面から考えられる。第一に、教育行政側、すなわち共和政府の意図に、この活動の意図が沿っていたこと。

そうであるからこそ、林間学校の活動を推進する委員会が結成され、学校金庫からの補助金が出され、結果的に、二〇世紀初頭にはバリのすべての区で実施されることになった。政府が期待した役割は、林間学校の集団生活の中で得られる規律であり、その活動が目ざした清潔さ、衛生の獲得だった。

第二に、この活動が都市の労働者階級によって支持されたこと。

貧しく、劣悪な環境に生活する彼らの子どもたちはその多くが慢性的に不健康な状態にあった。ダウンスが強調するのもこの点である。彼女は、林間学校が子どもに身体的な規律を課すことから、民衆階級を支配するための道具としてそれをみなす、操作主義的な見方に對して批判的である。当然そのような可能性は認めつつも、「しかし、この見方はあまりに単純すぎて一方的な見方でしかなく、一九世紀後半のフランスの差し迫った物質的な文脈を無視するものである⁽⁸⁶⁾」というのである。この考えを本稿の関心によってさらにすすめれば、労働者階級自らが自分たちの健康などについてこれまで以上の配慮をするようになったことも考えられるだろう。その傾向はすでに述べたように、一九世紀末の身体への関心が増大するという文脈にあったのである。だからこそ、強制ではない林間学校の活動に子どもをわざわざ送ることを選んだのではないか。このように、活動の主催者たる行政側と参加者である民衆側の両者が林間学校に利益を見出したことこそが成功の原因と考えられる。

さらに指摘したいのは、第三として、活動の本当の参加者である子どもたち自身に林間学校の活動が受け入れられたからではないか、ということである。たしかに活動が行政にも民衆の大人にも支持さ

れたとしても、子どもたちがそれにうまく適合できる、あるいはそれが彼らに受け入れられなければ活動には自ずから無理が生じるだろう。都会と異なる自然環境の中で子どもたちが解放感を得たことをサルセイの記事は指摘していた。林間学校はただ療養であるだけではなく、子どもたちにとっては気晴らしやレクリエーションとして機能したのではないか。それには活動それ自体もさることながら、自然という要素を無視しえない。一九世紀後半において、自然への志向が余暇や療養と結びついて展開した。林間学校が子どもたちにとって気晴らしになりえたことは、バタイヨン・スコレルの活動に、子どもたちが魅力を見いだせなかったり飽きてしまうことが多かったりしたという先行研究の指摘とは対照的である⁽⁸⁷⁾。子どもたちが自然の中で解放感や喜びを感じたこと、それが林間学校の成功の背景にあった可能性を、以上の考察から指摘しておきたい。

おわりに

これまで、コティネおよび共和派による林間学校の活動とその発想に注目することで、その活動が教育行政や社会にとってどのような役割を果たしたのかを明らかにした。

生活全体を通じて子どもたちの健康増進を試みるコティネの林間学校が登場したのは一八八〇年代前半であり、それが後半には政府からの援助を得ることで活動を拡大していく。この活動は、衛生に配慮した生活環境の中で、特に貧しい子どもたちを対象として、衛生的な習慣を身につけ、さらに散歩やその他の身体活動によって体を動かすことを目的とした。このような活動は、同時期の初等学校

において試みられていたことに親近性があり、むしろ学校での身体教育をより徹底した内容となっていた。その意味で、正規の授業から見れば周縁的ではあったも、初等教育に込められた理念を読みとくうえでの重要性は無視できない。

林間学校活動の背景には、一方で余暇としての自然への志向や運動への関心が社会一般に存在したのと同時に、他方では共和派政府の思惑もまた存在した。すなわち、学校教育を通じて衛生の規範を内面化させることであり、国民全体の体力を増強させることであった。しかも、政府が積極的に支援を開始した一八八〇年代後半から九〇年代にかけては、ちょうど身体教育全体の見直しの時期と重なっていた。林間学校の組織化も、そうした流れの中にあったのではないだろうか。さらに、カトリックやプロテスタントとの対抗という側面でも、この分野において自らのイニシアティブが発揮されることは共和派にとって都合が良かったに違いない。最初に働きかけたのはコティネのほうであったとしても、共和派政府の側にも働きかけに応じる需要が存在した。

また、林間学校への参加者数および規模の拡大は、この活動が子どもたちの両親によって支持された結果ではないかと考えられる。そもそも、学校および学校的な価値に対して不信感を抱いていれば、子どもを教員にあずけることもなかっただろう。さらに、参加する子どもたちにとっては、活動がレクリエーションとして機能したからこそ、その後も世紀をまたいでむしろ活発になっていったのではないか。林間学校に対して、行政、両親、子どもたちがそれぞれ利益を見出したとすれば、この活動は当時の社会のニーズにきわめ

て適格的だった考えられる。こうした点については、参加者側についてさらに考察を深める必要があるだろう。

では、林間学校は、学校教育による国民統合や規律化などのプロセスとはどのような関係にあるのだろうか。おそらく、自然に囲まれて健康の維持・増進を図るというこの活動は、必ずしもそうしたプロセスと矛盾しない。体操や射撃といった活動の例のように、参加者に気晴らしとして受容されたことが、むしろ積極的な参加を促すことになり、最終的に近代国家に資する結果をもたらしたのではないか。その反面、活動が参加者に受け入れられなければならないという点でもあり、民衆にとっては活動に対する積極的な動機、たとえば娯楽や余暇的な要素が不可欠であったと指摘できるのではないだろうか。やはり、そのためには参加者側について、彼らの側の要求が何であったのかについての考察が不可欠となる。

林間学校活動を広い文脈で捉えたとき、それはいわば学校の身体文化と家庭あるいは社会の身体文化が出会う場と考えられる。学校への就学および通学が定着するにつれて、社会における学校の影響力は次第に大きくなっていくだろう。本稿であつかったのは、その萌芽期といえる時期であった。その後、生じる摩擦や融和の側面について、特に身体に焦点を当てても課題は多い。たとえば、「フェリーの学校」などの学校空間の整備と子どもとの身体との関係、授業としての身体教育と家庭や地域における生活に根ざした子どもとの身体性などである。また、時代がさらに下るほど林間学校活動が活発になることから、時間軸をより長くとったときには活動の意味や内容においてどのような変化が生じるのか。余暇のあり方と林間学校

活動および学校での身体教育はどのように関係しているのか。こうした残された問題については、今後の課題としたい。

注

- (1) 現在のフランス語でも、この単語は林間学校あるいは臨海学校一般を指すものである。ただ、本稿であつた時期のコチャネおよび共和派の活動では、海へは行かず、ほとんどが田舎であつたり山であつたりするため「林間学校」と訳す。なお、コチャネは「Colonies Scolaire」という名称で活動を行つていたが、煩雑さを避けるため、本稿にはいずれも「林間学校」とする。
- (2) «Instruction pour la formation et le fonctionnement des colonies de vacances», in, *Revue Pédagogique*, 1887, tom. 11, p. 44. 以下、この記事は「Instruction」とし、雑誌はR. P.と略す。この史料については後述参照。定義を目的にいうと、Francisque Sarcey, «Les colonies de vacances», *R. P.*, 1887, tom. 10, pp. 193-198. とあるが、これは同様である。
- (3) «Instruction» p. 44.
- (4) Rey-Herme, P. A., (1954) *Les colonies de vacances en France*, Paris, chez l'auteur.
- (5) Downs, Laura Lee, (2002) *Childhood in the promised land: working-class movements and the colonies de vacances in France, 1880-1960*, Durham, Duke University Press.
- (6) 教育博物館とは、一八七九年五月二三日のデクレで創設された公教育省内の機関である。当初は教育関連の出版物や教材などを集める博物館としての役割のみだった。一八八〇年に運営委員会が設置され、グレアルが代表となることでその活動を広げ、教育問題に関する研究機関としての役割もはたすことになった。その過程で『教育雑誌』が機関誌となる。Buisson, Ferdinand, dir., (1911) *Nouveau dictionnaire de pédagogie et d'in-*

struction primaire, Paris, Hachette, pp. 1367-1371. を参照。

- (7) Ognier, Pierre, (1984) «L'idéologie des Fondateurs et des administrateurs de l'école républicaine à travers la Revue Pédagogique de 1878 à 1900», *Revue française de Pédagogie*, 66, p. 8.
- (8) この点に関してはオニエールも指摘しているが、それぞれ「Ognier (1984) p. 7, Ognier (1988) *L'école républicaine française et ses miroirs*, Berne, Peter Lang, p. 26.
- (9) Mayeur J.-M. (1973) *Les débuts de la Troisième République 1871-1898*, Editions du Seuil, p. 162.
- (10) 福井憲彦編(二〇〇一)『新版世界国史2 フランス史』山川出版社、三五一頁。
- (11) 特に国家と教会の対立をテーマとしたものとして、小山勉(一九九八)『教育闘争と知のハゲモニー 御茶の水書房、谷川稔(一九九七)『十字架と三色旗 もつとつと近代フランス』山川出版社、を参照。
- (12) 正式には「公初等学校の教育的編成の法規に付属するカリキュラム(Programmes annexes au règlement d'organisation pédagogique des écoles primaires publiques)」である。本稿ではR. P., 1882, tom. 1, pp. 141-161. と全文があるため、これを参照した。
- (13) Albertini, Pierre (1998) *L'école en France XIXe-XXe siècle*, Paris, Hachette, p. 71. & Prost, Antoine, (1988) *Histoire de l'Enseignement en France, 1800-1967*, Paris, Colin, p. 277. などを参照。
- (14) ベタイヨン・ヌコールとは、公立の初等・中等学校の児童・生徒をその名のもとに召集し、体操と軍事教練を行う活動のことである。軍隊と同じように中隊、小隊というように構成されていた。参加は任意で、活動は軍人によって監督された。清水重男(一九八六)『フランス近代体育史研究序説』不味堂出版。亀高康弘(二〇〇二)『「学童の大隊」の目的と限界 一八八〇年代フランスの共和主義教育改革における軍事教育の役割』『文化学年報』五一、一四七-一七四頁。Bourzac, Albert (2004) *Les Bat-*

- ations scolaires 1880-1891: L'éducation militaire à l'école de la République. Paris, L'Harmattan.
- (15) Arnaud, Pierre, (1982) *Les Athlètes de la république. Gymnastique, sport et idéologie républicaine 1870-1914*. Paris, Privat, pp. 57-61.
- (16) 清水 (一九八六) 一八四—一八六頁。
- (17) Ognier (1986) p. 142. 指導書はそれぞれ *Manuel de Gymnastique et des exercices militaires*. や *Gymnastique et des jeux scolaires*. である。タイトルからも、重点が軍事教育から遊戯へ移っていることがわかる。
- (18) それぞれ、山田登世子 (一九九八) 『リゾート世紀末』筑摩書房、第五章のタイトルと、ケセルゴン、ジュリア (一九九二) 『自由・平等・清涼入浴の社会史』鹿島茂訳、河出書房新社の書名である。
- (19) グベール、ビエール (一九九二) 『水の征服』吉田弘夫・吉田道子訳、パピルス。ヴィガレロ、ジョルジュ (一九九四) 『清潔になる〈私〉』見市雅俊 (他) 訳、同文館。Nourisson, Didier, dir., (2002) *Éducation à la santé XIXe - XXe siècle*. Paris, Éditions ENSP. など。
- (20) Faure, Olivier, (Hygiène, hygiénisme et santé publique en France, XIXe-XXe siècle), in, Nourisson (2002) pp. 13-30.
- (21) 田中直康 (二〇〇一) 『ローヌ県衛生評議会 一九世紀フランスの衛生行政』『文学研究科紀要』早稲田・院、四八—四、二九—四〇頁。田中は「衛生評議会」という名称を使用するが、本稿ではヴィガレロの訳書にならって「衛生委員会」という訳語を用いる。
- (22) ケセルゴン (一九九二) 一〇一—一〇七頁。
- (23) ケセルゴン (一九九二) 一—八頁。
- (24) 井本青子 (二〇〇四) 『フランス第三共和政前期初等公教育における衛生教育』『史料』四五、三五頁。
- (25) L. J., (L'inspection médicale des écoles) R. P., tom. 8, 1886, pp. 519-521. この著者が誰であるかは特定できないが、文章の内容から視字官ではなくて視学官であると推測される。
- (26) L. J., (L'inspection médicale des écoles) R. P., tom. 8, 1886, p. 519.
- (27) L. J., (L'inspection médicale des écoles) R. P., tom. 8, 1886, p. 521.
- (28) ケセルゴン (一九九二) 一—八頁。
- (29) 《Règlement pour la construction et l'ameublement des maisons d'école》R. P., 1880, tom. 6, pp. 352-382.
- (30) 《De la construction et de l'ameublement des maisons d'école》R. P., 1880, tom. 6, p. 351.
- (31) Prost (1968) pp. 113-114.
- (32) Prost (1968) p. 125. DOCUMENT 21, 22.
- (33) このように第三共和政期以降に出現した、非常に同一性の高い学校のタイプを「フェリーの学校」という。Chatelet, Anne-Marie, (1993) *Paris à l'école*. Paris, Pavillon de l'Arsenal, P. 78.
- (34) 一八七五年から一八七九年のあいだに、五つの主要な通達および法律等が制定されている。一八七五年一月一日 学校の近接に関する通達、一八七六年六月十五日 学校建設に関する通達、一八七八年六月一日 学校建設のための特別金庫創設の法律、一八七八年八月一日 前述の法律を施行するための省令、一八七九年三月三〇日 学校の建物や設備に関する諸問題を検討するための特別委員会を設置するアレテ、など。R. P., 1880, tom. 5, p. 352.
- (35) 山田 (一九九八) 六四—一八頁。
- (36) 山田 (一九九八) 一八〇—一九二頁。
- (37) Rauch, André, (1996) *Vacances en France de 1830 à nos jours*, Hachette, p. 28.
- (38) Lecocq, Benoît, (1986) *Les sociétés de gymnastique et de tir dans la France républicaine (1870-1914)*, *Revue Historique*, 276, pp.

- 158-159.
- (39) シャールトン・ビエール (一九八九)『フランス文学とスポーツーハセー一九七〇』三好郁朗訳、法政大学出版局、四七―五三頁。
- (40) 小石原美保 (二〇〇二)「身体への近代的まなざし」フランス文学にみる身体観・スポーツ観、望田幸男・村岡健二監修『近代ヨーロッパの探求』スポーツ・ミネルヴァ書房、五五頁。
- (41) Rauch (1996) p. 42.
- (42) Downs (2002) pp. 36-37.
- (43) Heywood, Colin. (1988) *Childhood in Nineteenth-Century France: Work, health and education among the "classes populaires"*, Cambridge University Press.
- (44) Downs (2002) pp. 20-26.
- (45) Downs (2002) p. 16.
- (46) Downs (2002) p. 18.
- (47) 学校旅行とは異なり、Caravane Scolaire は「修学旅行団」という訳が『クラウン仏和辞典』三倉堂、第五版にあつたため、これを用いた。記事は Ch. Durière (Les caravanes scolaires), R. P., 1883, tom. 2, pp. 389-399.
- (48) Durière, (Les caravanes scolaires), R. P., 1883, tom. 2, p. 397.
- (49) Sarcey, (Les colonies de vacances), R. P., 1887, tom. 10, pp. 193-196. または Downs (2002) p. 19.
- (50) 記事は (Les colonies de vacances à Paris), R. P., 1887, tom. 10, pp. 513-516. 編集部のコメントは p. 513. ダウンスもこの記事を参照している。
- (51) (Les colonies de vacances à Paris), R. P., 1887, tom. 10, p. 516.
- (52) Rey-Herme (1954) p. 224.
- (53) Downs (2002) pp. 18-19. へむじ金額などについては言及がない。
- (54) Rey-Herme (1954) p. 214.
- (55) Downs (2002) p. 44.
- (56) Downs (2002) p. 19.
- (57) へむじの数字は Rauch (1996) p. 68. を参照
- (58) Downs (2002) p. 68. むしろカトリックの動きが、共和派に対抗したものであった。
- (59) その他の慈善団体の活動は第一次大戦までは国家の制度と結びつくものではなかった。Rauch (1997) p. 70.
- (60) Rey-Herme (1954) p. 69.
- (61) (Instruction), pp. 44-59. この記事は、小冊子として発行されたもの、抜粋のせいである。
- (62) (Instruction), p. 44.
- (63) Sarcey, (Les colonies de vacances), R. P., 1887, tom. 10, p. 196.
- (64) (Instruction), pp. 47-48.
- (65) (Instruction), p. 50.
- (66) (Instruction), p. 51-52.
- (67) ケセルゴン (一九九二) 一〇一―一七頁。たとえば、水道、湯沸かし器、洗面所、足湯、または浴室など。これらは中等学校の衛生設備としてあげられたものである。
- (68) Downs (2002) p. 45.
- (69) (Instruction), p. 57.
- (70) 以下、一日の流れについては (Instruction), pp. 57-68.
- (71) 林間学校では男女は分けられ、男子は男子のみ、女子は女子のみでそれぞれ別の場所に宿泊した。ダウンスは、「林間学校が自ら明らかにする教育の使命は、つねにジェンダーの中性的な存在である『子ども』という用語によって理解されるのである」として、「一貫して『未来の男女』を作り出すものではなかった」としている。Downs (2002) p. 9.
- (72) 学習的な側面としては、散歩の中で、社会見学のようにさまざまな場所を訪れることも行う。工場であったり、博物館であったり、石切り場や

- 粉引き所、監獄などがある。 Rey-Herme (1954) p. 216.
- (73) 《Instruction》, p. 57.
- (74) Downs (2002) p. 26-35. ヌイ＝ヘルムで、林間学校は家族よりもこの学校に頼るようになったという。 Rey-Herme (1954) p. 261.
- (75) Sarcey, 《Les colonies de vacances》, R. P., 1887, tom. 10, pp. 197-198.
- (76) Downs (2002) pp. 51-52.
- (77) Sarcey, 《Les colonies de vacances》, R. P., 1887, tom. 10, p. 198.
- (78) Downs (2002) p. 55. 元の使用は Cottinet, *Les Colonies de vacances en France à l'étranger*, p. 589.
- (79) Downs (2002) p. 47.
- (80) Downs (2002) p. 37.
- (81) 亀高康弘 (二〇〇二)
- (82) イリッチ、イヴァン (一九七七) 『脱学校の社会』 東洋・小澤周二訳、東京創元社。松塚俊三 (一九九八) 「リテラシーから学校化社会へ」『岩波講座世界歴史22 産業と革新』岩波書店、二四五―二六五頁。